

発達障害学生支援への学生サポーター導入の可能性と限界

-可視性が異なる障害学生への支援に対する認識と学生サポーターの実施報告から-

| | |
|-------|--|
| 企画者 | 横田晋務（九州大学基幹教育院） |
| 司会者 | 田中真理（九州大学） |
| 話題提供者 | 横田晋務（九州大学基幹教育院） 永瀬 開（山口県立大学社会福祉学部） 面高有作（九州大学基幹教育院） |
| 指定討論者 | 佐々木銀河（筑波大学ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンター） |

KEY WORDS: 発達障害 修学・生活支援 学生サポーター

【企画趣旨】

障害者権利条約、障害者差別解消法といった社会的情勢を背景に、高等教育における障害学生支援体制の構築や支援の提供が行なわれている。これらの実施にあたっては、修学上、日常生活上の支援にあたる人材の育成が必要であると考えられる。このような支援を担う人材として、学生生活全般に関する実践的知識や学術上の専門的知識を持つ一般学生を学生サポーターとして登用することで効果的な期待できる。しかし、現状として、発達障害学生への支援に学生サポーターを活用した取り組みは少なく、実施する上で対象学生との関係構築などの問題が想定される。発達障害学生に対して学生サポーターによる支援を行う場合、障害が可視化されづらいという特徴から支援者側の障害理解や専門性といった支援を行う側の資質が重要であろう。そこで、本シンポジウムでは、比較的障害が可視化されやすいと考えられる身体障害や感覚障害と発達障害を比較し、修学上や生活上の支援に対する一般学生の認識とそれに関連する要因についての研究報告と、学生サポーターによる支援の実施報告から、発達障害学生に対して学生サポーターが支援を行うことの可能性と限界点について議論する。

【話題提供者の趣旨】

発達障害に対する潜在的態度と修学上の支援への認識との関連(横田)

発達障害学生の困難さとして、障害特性の個人差が大きく、目に見えづらいため、周囲から理解されづらいこと、視覚障害や聴覚障害と比較して、潜在的態度が否定的であることが明らかにされている(横田ら, 2017)。発達障害への態度が否定的である場合、教職員や学生といった周囲の存在の発達障害学生への支援の必要性や公平感が否定的に見積もられると考えられる。このような関連が、発達障害学生への支援の導入・実施に対する障壁となっている可能性があるだろう。したがって、発達障害学生への支援の充実のためには、発達障害に対する潜在的な態度と、支援に対する認識との関連を検討することに意義があると考えられる。本報告では、周囲の存在として、定型発達大学生を対象とし、障害に対する潜在的態度と修学上の支援への認識に関する一連の研究結果を報告し、学生サポーターが発達障害学生への支援者となることについて、視覚障害や聴覚障害といった状態像がより理解しやすいと考えられる障害との比較から議論するとともに、教職員、学生といった各支援主体が担うことができる支援について検討することを目的とする。

発達障害学生の生活支援における学生サポーターによる支援の可能性(永瀬)

サークルやアルバイトなど学外で活動する機会が多く、様々な他者と係わる機会の多い大学生活において、発達障

害学生はその生活全般において様々な困難さを抱えている。このような発達障害学生に対し、日常のきめ細やかな支援を行うことのできる存在として、学生サポーターの活用が考えられる。しかしながら、学生サポーター個人が持つ特性によって、支援に対する意識が異なることを踏まえると(Neville & White, 2011)、発達障害学生支援を担う学生サポーターの資質について、検討することが重要だろう。

これらの点を踏まえ、本報告では学生サポーター個人の特性として、自閉症スペクトラム傾向とソーシャルネットワークの強さに焦点を当て、これらの特性と発達障害学生への生活支援に対する意識との関連を明らかにした研究結果を報告する。また、この研究知見が学生サポーターによる支援の実際にどれほど応用できるのかという点について、報告者が関わった学生サポーターと発達障害学生によって構成されるピアサポートグループの活動を振り返りながら検討する。これらの検討から、学生サポーターが発達障害学生への生活上の支援を行うことの可能性について議論を行う。

学生サポーターによる修学支援における身体障害と発達障害の共通性と差異性について(面高)

発達障害者と周囲の者との関係については、「先入観や誤解を生じやすい状況がある」ことが指摘されており(岡本ら, 2012)、学生サポーターを活用する場合においても、関係をいかに構築するかが重要な点になると考えられる。松田(2012)が聞き取りを行った身体障害学生は、障害者のイメージを背負わずにすむ「呼応の関係」が理解のある居心地の良い関係であると述べており、障害をこえた本人の理解が関係構築において肝要であると考えられる。

発達障害と身体障害の関係構築における違いとしては、発達障害と比べて身体障害が周囲の理解を得やすいということだけではなく、発達障害の障害特性を理解することの難しさ(岡本ら, 2012)が、障害をこえた本人の理解を阻む障壁となっていると考えられる。

本報告では、身体障害学生の自然科学実験で学生サポーターを活用した事例について報告し、発達障害と身体障害への支援の共通点と差異点について整理する。また、昨年度の自主シンポジウム(面高ら, 2016)で示された、支援者支援を行うことや、学生サポーターが対応可能である範囲を設定することの必要性について検討を行うことを目的とする。

【指定討論者の趣旨】

佐々木氏には、発達障害学生への支援に対し、学生サポーターが支援を行うことについて、指定討論をいただき、今後の展望について議論する。

(YOKOTA Susumu, TANAKA Mari, OMODAKA Yusaku
NAGASE Kai, SASAKI Ginga)